不登校児童・生徒支援事例報告書

サポートルーム（校内別室指導）の活用について

不登校児童・生徒の状況

８名の生徒がサポートルームを利用している。個々の生徒により、登校の状況は異なるが、サポートルームでは、支援員が見守る中、生徒の登校する日数は増えている。

具体的な取組

○学級への帰属意識

・朝の職員の打ち合わせや学級指導に支援員が参加し、聞き取った内容をサポートルームの生徒に伝え、学級への帰属意識をもたせる。

・支援員が学級の状況を参観し、それをサポートルームの生徒へ伝えることで、学級の一員である自覚をもたせる。

○１日の生活を自己決定

・個別の学習の時間を中心に、グループでの活動や図書室、体育館での活動も利用することを可能としている。

・１日の過ごし方をサポートルーム支援員と相談し、生徒の意思を尊重しながら決めていくことで、自己決定の場を設ける。

○相談体制の充実

・心の相談員やメンタルサポーターが相談相手となったり、スクールカウンセラーによるカウンセリングを行ったりすることで、相談きる体制を作り安心・安全な風土の醸成に取組。

○学級復帰に向けたステップ

・給食の時間を学級で過ごしたり、参加できそうな授業は学級で一緒に学んだりする機会を設けて、学級復帰に向けた支援を行う。

・学校行事への参加については、個々の状況や考えを聞き、事前の準備に参加したり、当日は見学で参加をしたりするなど生徒の要望に合わせて支援を行う。

成果

・サポートルームの環境整備と教員等の支援体制の充実などチームとして支援ができたことで、サポートルームには、３名の生徒が安定して登校できるようになった。また、サポートルームを利用したことで、学級で生活を過ごせることができるようになった。

課題

・サポートルームに通う生徒への学習支援については、個々の状況に合わせて、進められるようにしていく必要がある。

不登校児童・生徒支援事例報告書

不登校生徒に対する別室指導について

不登校生徒の状況

本校における不登校生徒の出現率は 7.2%であり、様々な理由により不登校になった生徒が在籍している。集団になじめず、家庭で学習を進めことができる不登校生徒もいれば、「心の教室相談員」に話をしに来ることで学校とつながっている不登校生徒もいる。様々な状況にある生徒に合わせた登校のきっかけをつくることが必要であると考える。１人で学習を進められている生徒には「学習の補充」を登校のきっかけとし、「話を傾聴し受容されたい」という生徒には、「話を聞く場所の提供」が登校のきっかけにできると考えている。

具体的な取組

〇校内別室支援員の配置の工夫

・生徒の様々な個性やニーズに対応できるよう、本校では週５日配置された校内別室支援員を、曜日ごとに１人、５人体制とした。不登校生徒との相性や、登校したときに取り組みたいことに対応できるようにした。

・校内別室支援員を紹介する案内を作成し、不登校生徒やその保護者に働きかけ、校内別室への登校につなげた。

〇話を聞く場所の提供

・話をしたいと思われる生徒に対しては、校内別室支援員に「傾聴」を心がけるように伝え、来て話しをする場所の提供を行った。その結果、継続的な別室登校につながり、生徒は校内別室支援員と担任が情報共有をしても良いという気持ちが起こり、これまで以上に担任が生徒理解を深められ、教室復帰のステップが検討しやすくなった。

〇学習の遅れに対する対応

・登校渋りしている生徒の保護者が学習の遅れを心配していることに対応し、別室での学習の補充をすることが可能であることを伝えた。生徒の状況に合わせて、教室復帰につなげた取組に生徒、保護者も安心したようだった。

・現在は別室登校ではあるが、安定した登校になり、不登校の時よりも表情が良くなり、自分のことを少しずつ話せるようになった。

〇校内の不登校支援体制の強化

・不登校の初期段階の生徒が、保護者に連れられ、遅れて登校してきたが、担任が授業中で、対応できなかったため校内別室支援員とつなげた。

・校内別室支援員と生徒との対話の中で、登校をしぶった原因も分かり、担任がその後クラスで対応し、不登校の防止になった。

成果

・不登校生徒の出現率が、約１%減少した。

・不登校予備群と見受けられる生徒の登校渋りに校内別室支援員が対応することができ、不登校とならず登校することができている。

・不登校生徒とじっくり話を聞くことができ、理解が深まり対応策を複数検討できるようになった。

課題

・不登校の生徒が、別室に登校できるようになった後に、別室登校日数のある程度の基準を作成するなど学級への参加する機会を生徒の状況に応じて設け、次のステップに向けた協議が必要である。